

新温泉に行く大阪の坊っちゃん

——岩野泡鳴「ほんち」——

鷺崎秀一

岩野泡鳴「ほんち」は、大正二年三月号の『中央公論』に掲載され、泡鳴文学の中でも代表作の一つとして数えられる作品である。本作の脱稿は、当時泡鳴が付けていた『統池田日記』によれば、偶然にも明治の終焉の日である明治四十五年七月三十日であり、その後、翌年（大正2年）の『目黒日記』一月十七日付には「「ほんち」の訂正を終った」、一月二十日付には「「ほんち」中の大阪語を読んで行けないところを直した」とあるように、脱稿後即発表が多い中、本作は、「大阪語」を中心に推敲が重ねられた作品であった。まもなく刊行された現代傑作叢書第三編「ほんち」（大正2・6 植竹書院）には表題作として所収され、同書に付された泡鳴の「注意」によれば、「ほんち」は、「著者が人物の生活に於ても、また人物の用語に於ても、純粹の大阪物を書いて見たいと云ふ最初の作品」であったという。本作のセールスポイントの一つが大阪であったことは留意する必要がある。

先行研究では、どのように言及されているか。梗概の紹介も兼ねて、まず比較的近年に出版された『大阪近代文学事典』（平成17・

5和泉書院）から、浦西和彦が執筆した「〔内容〕」を引用したい。

ほんちの定は、繁さん、長さん、松さんの悪友に、玉突きに負けたおごりに宝塚へ散財に出かけた。梅田からの電車が新淀川の鉄橋を渡る時など、向こうに焚い松をともしして漁でもしている光が水にきらきらと映って、「もう鮎が取れるのんや」と、語っているうちに十三駅も過ぎてしまった。ほんちが電車の窓から首を出したとたんに、頭をいやというほどがんとぶつけてしまった。蛭ヶ池辺では電柱が電車軌道の両側に立っているのではなく、真ん中に立っていたのである。頭が痛むが、ほんちは今から大阪へ引き返すといい出せなかった。宝塚につくと、医者にも見せないで、友人らはほんちの苦しいのをほったらかしといて、酒だ、藝子だと、ほんちの財布を当て込んで遊ぶのである。店のものが医者を探し当てて診察して貰った時には、脳味噌が外に出ていて、もう手遅れになっていた。ほんちは「死にとむない」ばかりの痛みと後悔にもだえて、おのれの愚かであったことを責めるのである。

このような内容をもつ本作に関して、まず舟橋聖一が『岩野泡鳴伝』（昭和13・2 青木書店）にて「「ほんち」はこの主張（※一元描写）の実践であった。と同時に、有情滑稽物と称する彼の小説の一

系列の源泉をなした作品」と述べ、当時泡鳴が力説していた描写論の「実践作」で、かつ後に有情滑稽をテーマとした作品集『猫八』（大正8・5玄文社）に所収される作品群の「源泉をなした作品」と位置づけている。

昭和期の「ほんち」研究の多くは、この舟橋の見解をおおむね踏襲しており、たとえば、吉田精一は、「正美先生」（大二年二月）などは、すべてのちに彼の命名した有情滑稽物の範疇に入り、最初の作品をのぞけば、すべて一元描写の方向で押している。しかし何といつてもこの方向での佳作で、以降の発展の確実な一つの基点となったのは「ほんち」（大二年三月）である^④としている。かくして、「ほんち」は、一元描写と有情滑稽という二本の柱をもつ作品とみなされてきたが、すでに高橋敏夫が描写論の文脈で丹念に論じており、本作が一元描写の実践作であることの裏付け、またその分析や評価は進んでいる。近年の研究では、鈴木鷹理が「二元描写」の論理に従って語られた回想であるからこそ、物語の現在や実際の様子との間に距離が生まれ、単なる哀感に留まらない滑稽さ^⑤があると述べるように、一元描写と有情滑稽を統合する観点も提起されている。

このように、描写論からのアプローチが手堅い成果を上げているのに対し、有情滑稽については、論者の多くが言及しているにもかかわらず、その意味や効果に関して曖昧なものが多い。たとえば、先の舟橋聖一は（笑い）の描かれた「ほんち」が、「単なるユーモア小説ではなく、常に人生の相を暗示し、彼の哲理を現実の上に把握しようとする象徴的な意図を持っている」との見解を示している

がこの舟橋の意見を踏襲している『近代文学研究叢書第十九卷』（昭和37・12）では「人間の愚かさを描いた短編」とされ、また大久保典夫も「周囲の動きと主人公の内面の落差を、主人公ほんちの感慨として描いてみせた点」^⑥に特徴を見ており、すでに論者それぞれ受け止め方は違う。さらに、時系列的に後になる野口武彦の見解は「ひとりのお人好しの馬鹿の物語」、平成以降では、田中和恵が「定さんの切羽詰まった状況と心情、そして思いやりのない（友人）たちの冷淡な態度との落差が、滑稽であるとともに、悲哀を醸し出している」としている。

かように捉えどころのない有情滑稽であるが、そもそも泡鳴自身も具体的に規定しておらず、また、その言及があったのも、後年の作品集である『猫八』の「はしがき」^⑦においてである。これを「ほんち」の解釈に適合すること自体、土台無理な話だが、いったん有情滑稽については置くにしても、多くの論者が指摘するように、本作に（笑い）のニュアンスがあることは間違いない。

当時の同時代評を見ても、たとえば、山田楨榔「三月の文壇」（『帝国文学』大正2・4）では「ほんまに阿呆らしいものである。（略）夏目漱石氏が若しも斯うした主人公を取り扱ったならば、屹度あのユウモアに富んだ洗練された筆ざりはを以て、読者の芸術欲を十分に充足さして呉れたであらうに。」とあるほか、Z・T「小説月評」（『奇蹟』大正2・4）でも「残忍なユーモアが、力強くはないがはつきり出てゐる。」という評が見られる。じつは、これまでの先行研究ではほとんど触れられてこなかったが、「ほんち」には多くの同時代評が残されており、泡鳴自身も単行本『ほんち』での「注意」

では「この集中最初の三篇は、いづれも発表の当時、中央公論若くは早稲田文学誌上で多少の注意を引いた物として、出版書肆の方で撰定して来たのに筆者がそのまま出版の承知を与えたのである」と述べている。実際「読売新聞」(大正2・7・5)の書評欄には、「巻頭の『ぼんち』は嘗て雑誌に発表した時にも好評を博したる作にして大甘なる老舗の若旦那の生活を描写したる作なり。」とあるように、肯定的な評価も少なくなかった。もちろん、いずれも「ぼんち」の解釈にかかわる重要な資料であり、かつ先行研究に同時代の視点の欠落しているものが多いという課題もあるので、本論では、まず一つずつ見ていきたいと思う。次に挙げるのは、その肯定的な評価の同時代評である。

①青峰生「文芸雑感」(『国民新聞』大正2・3・9)

氏の作品中では可成の佳作であると思ふ。未だ女を知らぬ大店のうぶなぼんちが、一夜、一命にもか、はる傷に悩みながらも、尚お知らぬ女といふものに心を惹かれていらくする心持が面白く写されてある。

②無署名「三月の雑誌」(『読売新聞』大正2・3・11)

初生な坊つちやん育ちの心もちが濃やかに味はれる。松さんと云ふ男も輪郭強く浮んでゐる。面白い作だ。

③無署名「ぼんち」(岩野泡鳴) (『独立評論』大正2・4)

それ／＼の人物の動作に大阪人気質もよく現はれて遺憾がないやうな気もする。寂しかった三月の文壇中佳作の一に推すべきものであろう。(※傍線は論者による。以下同じ)

総じて「ぼんち」こと「定さん」とその友人たちの心情や気質が

うまく描かれているという評価である。一方、先の「読売新聞」が「好評を博したる」というほど絶賛されていたわけでもなく、否定的な評価は次のとおりである。

④月旦子「読むがま、(二)——弥生月の文壇——」(『時事新報』大正2・3・11)

これは氏の大阪研究の第一作だとのことだが、相変らず粗削りなものであった。大阪と「ぼんち」、それは何より先ず捉ふべき題材で誰しもこれに筆を染むべきだが、観照の態度や、人物の捕捉には否はなかつた。唯だ事件の上に、幾分の無理があつたこと、叙筆の点に、今一層の洗練をと望まれた

⑤千葉亀雄「文壇時評」(『文章世界』大正2・4)

やはり題材の上では、変つた境地を捉へたと云ふことの外に、何ものをも暗示されなかつた。

これらに、先に引用した『帝国文学』の「ほんまに阿呆らしいものである。」の評は「つまり斯うした畑のものは泡鳴氏に相応しくないであらう。」と続けられるので、不評の一つと数えられる。当時横行した印象批評で、具体的な検証に基づいた批評でもないのだが、ともかく評価されているとは言えない。その他、肯定的とも否定的ともつかない同時代評は次のとおりである。

⑥十束浪人「三月の文芸雑誌」(四) (『東京日日新聞』大正2・3・13)

女の香に動かされる耐へ難い本能の悶えなどは確に泡鳴式のものたるを失はぬ。

⑦無署名「岩野泡鳴氏の『ぼんち』」(『新潮』大正2・4)

此の作は、作者が大阪へ行つて来た一年ばかりの間の収穫で、

謂は、其の土産小説である。(略)さすがに此の作者が確実な描写の手腕を持つて居ることが思はれる。しかし、作者の興味——心持が只ぼんちの薄甘く出来た性格の上のみ一直線に働いて居て、外の人物や光景は、彼の性格を明瞭にする方便として描いたに過ぎない。

⑧ Z・T 「小説月評」〔『奇蹟』大正2・4〕

「残忍なユーモアが、力強くはないがはつきり出てゐる。」

(中略)

「単にあれを、大阪といふ都市の批評と見たつて面白いぢやないか。」

⑥ 「東京日日新聞」の評は、おそらく「耽溺」や「放浪」の泡鳴を念頭に置きながら、あるいは半ば茶化したようにも取れる。「ぼんち」の読み方であるが、有情滑稽や一元描写というキーワードを踏まえた後年の読者には想像も付かない読み方で、興味深い。

しかし、列挙して改めて認識させられるのは、傍線部のとおり、いかに大阪が意識して読まれていたかである。「作者が大阪へ行つて来た一年ばかりの間の收穫で、謂は、其の土産小説」とは⑦「新潮」の同時代評だが、当時の泡鳴の動向をも織り込んで、明らかに「ぼんち」の大阪に注目している。同様の着眼が、先に引用した③「独立評論」や④「時事新報」の評にも確認され、さらに、⑧「奇蹟」の同時代評では「単にあれを、大阪といふ都市の批評と見たつて面白いぢやないか。」とある。これは大阪を舞台に、そこに住む人々を描いた「ぼんち」の〈笑い〉の意味を、都市批評として捉えたものである。なお、泡鳴は幼少期を大阪で過ごし、その後東京に移る

も、「ぼんち」執筆時は再び大阪在住であった。「ぼんち」には、いわば、大阪人が大阪人を描くという自己批評的な要素も含まれている。すでに拙稿では、泡鳴の描く有情滑稽の作に少なからぬ批評性があることを指摘してきたが、「有情滑稽物と称する彼の小説の一系列の源泉をなした作品」と言われる「ぼんち」にも、そういった批評性を指摘しようとすれば、より泡鳴の描く有情滑稽の内実に迫ることになるのではあるまいか。

二

「ぼんち」執筆当時の泡鳴は、北海道での蟹缶詰事業での失敗を受け、つてを頼り『大阪新報』の記者をしていた。府下池田(現大阪府池田市)に居を定め、「ここから五里の道を電車で三十分で大阪へ通う」と『池田日記』冒頭部にはある。この「電車」を舞台にした作品が「ぼんち」であり、それは開業して二年の箕面有馬電気軌道(現阪急宝塚線)のことであった。

先に引用した「内容」にもあるとおり、「ぼんち」の登場人物たちは、この箕有電車に乗って宝塚に遊びに行く。一見、特段の問題もなく思われるこの構成だが、同時代的な感覚からすると、じつは引つかからないものがなくはない。というのも、明治四十年代は、関西の私鉄開業ラッシュの時期であり、すでに敷設されていた国鉄の路線と競合する形で、京阪・阪神そして箕有電車と大阪中心部から郊外への輸送体制が整備されている。中でも後発の箕有電車には「全く大阪の人士を散開せしむる為の電車で、純然たる都市の遠心

力の産物と言ひ得るものは、現今に於て恐らく唯だ此一会社(註)のみ」との評価の声もあったのだが、当の泡鳴は、かような大阪の現状に対し、「あらゆる電軌屋の巧みなおだてに乗つて、わけもなく郊外におびき出されてゐるのであつて、その真の心持ちは昔の通り、終日芝居に入りびたつてゐるのと大した違ひはない」と冷めた言葉を残している。「ほんち」でも、わざわざ足を運んだ宝塚の新温泉であるのに、土地の芸子に「当り前のお湯やおまへんか」と水を差されたり、「笑ひながら、『うちの人も新温泉だつせ。』と口出しされたりする場面がある。「ほんち」には、乗客数を増やすために作られた人工の新温泉と、それを有難がる人々を揶揄する意識も垣間見える。

何故当時の泡鳴は、自身が暮らす大阪社会を一步引いた位置から眺めていたのであろうか。その理由を探るべく『池田日記』を紐解いてみると、まず彼の生活面であるが、記者といへど事務所へは毎日通う義務はなかつたようである、記事も文芸に限らず、経済や社会に関する寄稿も行つてゐる。他紙に原稿を書くこともあり、また自身の単行本の出版準備も並行して行つたなど、比較的自由な待遇であつた。箕有電車とともに新設された近隣の箕面動物園や前述の宝塚新温泉にも実際に通つたり、市内の中之島・道頓堀・千日前を遊歩したりと、幼少期以来の大阪生活を満喫している様子さえ窺える。

しかし、ほどなく給与と出勤体系とに不満を抱くようになり、帰京を兼ねた退社を決意するのが大正元年九月である。明治四十四年四月から始まつた泡鳴の帰阪生活は、わずか一年半で幕を下ろしている。その間、彼の大阪観を決定づける重大な事件が存在したわけ

ではないのだが、実際に生活し、感じ取つた結果が「ほんち」には表れているのである。次に引用する場面には、泡鳴が大阪に暮らす人々をいかに見ていたか、その一端が表れている。

その時、渠はどうした拍子か、——見てゐた定さんが思ひ出してもおかしくなるのだが、——自分の脱いで置いた麦藁帽子と隣席の人のとを取り違へ、隣席の人の被つてゐた帽子をその人のあたまから取つて自分のあたまへ上せた。

『どうした？』東京口調で怒つた隣りの人は、それを突差の間に奪ひ返した。

(中略)

多くの乗客は東京弁の怒り声がした方へすべての注意を向けた。中には、その時の様子を見てゐたので、思はず吹き出したのもある。

すでに、高橋敏夫が指摘(註)しているが、「ほんち」では、要所で東京弁による相対化が為されており、それが本作の〈笑い〉の効果に大きく関係している。たとえば、電柱に頭を打つたほんちに対しては、次のとおりある。

『馬鹿だ、なア』と云ふ東京人の声が車台の隅から聴えた。また、見える限りの乗客等は、すべて目を見張つて、あざけりの顔をこちらに向けてゐる。

そして、本作で繰り広げられる一連の喜劇は、次の言葉とともに締め括られる。

『馬鹿だ、なア』と電車の隅から、あの時聴えた東京弁が憎いほど思ひ出された。誰れに向つても助けを呼ぶことさへ、も

う、手後れになつたと云ふやうな心細さに押し詰まつた。

かような物語を書いた泡鳴は、自身が暮らす大阪の社会を、東京と比較せずにはいられぬ人物であつた。とかく泡鳴は同じ見解を複数の媒体で披露する傾向が見られるのだが、この時期、各紙に掲載された彼の大阪論（東京との比較）は執拗で、また内容的にも重複の多いものであつた。たとえば、「ほんち」執筆の数か月前、『女子文壇』（明治45・4）で発表された随筆「大阪の進歩と東京の進歩」の章立ては次のとおりである。これは、自ら「大阪東京優劣論の概論だ」と述べているものである。

▲大阪の卸商、東京の小売商、▲不断の煤煙、電車の発達、▲大阪には遊んでゐる者が不在、▲東京は貴族式、大阪は平民式、▲東京人の意気、大阪人の金、▲東京のあつさり、大阪のこつてり、▲言語と風景

そして当時、発表された泡鳴の大阪に関する言及は次のとおりである。

・「髪かたち」（『女子文壇』明治44・9）

東京ツ児は上方連中には笑はれるが、見えないところを箱物にして裾などをわざ／＼木綿同様の物で出すことがある。一枚々々脱いでゆくに従つてい、物が出ると云ふ様な意気は大阪では見られない。

・「社会的利己心―船場の一隅より―」（『大阪新報』明治45・1・25）

東京人は暫く品のいい余裕を在して置く修練があるに反し、大阪人は直ちに目前の利に目が暗んでしまう。（略）大阪人が全く近代的になるまでには、もつと社会的利己心でも称するも

の素養を付ける必要がある。

・「大阪大学問題―事実と批評―」（『大阪新報』明治45・6・7）

大阪は現代の思想界からあまりに閉却せられてゐる。その癖、徳川時代の初期には、大阪でなければ生れない西鶴や近松のやうな大人物があつた。僕等は大阪にやがて東京を凌駕するやうな独特な文学や思想が実現するだらうと信じてゐる。

・「思想界に於ける大阪の将来」（『文章世界』大正2・1）

型に従ひさへすれば、人の心を動かすことは容易だ。これが大阪人を目あてにしての事業が何ごとにつけても手易い所以だ。（中略）

第二の西鶴は、大阪人が大阪人を大阪言葉で描写するやうになつてから、段々その出現の準備が出来て行くのである。

・「大阪の夏の印象 大江橋」（『中央公論』大正2・7）

大阪には、全体、東京よりも迷信が多いやうだ。

・「大阪の夏の印象 妙見さん」（『中央公論』大正2・7）

天然として存在してゐるのは、蒼空と白い水だ。蒼空は年中多くの製造場の煤煙にみなぎられて、住民の肺臓の裏皮には、黒い物がくつき溜つてゐると云はれる。（略）その水はよどみ勝ちで、諸方の堀々にはぼうふらを飛ばしてゐる。

これらの発表媒体を見ると、女性誌、総合誌、文芸誌、地方新聞と、じつに手広い。大阪に来る前後は、事業の失敗と離婚騒動というプライベートな話題を続けて報じられており、自身もまたそれに関する発言を厭わないことで注目を集め、ここでもまた大阪に流れていった作家を演出していたようにさえ受け取れる。ともかく、大

大阪は大都市にもかかわらず、よくも悪くも「平民的」であり、社会的な成熟度という点では遅れが見られるという趣旨である。ことに思想・文芸界の停滞を気にかけている節があり、それゆえ、泡鳴は、「大阪人が大阪人を大阪言葉で描写すること」で現出するという「第二の西鶴」に、自身がなろうとしていたのではあるまいか。

ただ、「ほんち」は、ローカルカラーこそ濃くても、郷土愛に満ちた作品ではない。そして見てきたとおり、泡鳴の言説は、やや大阪を卑下する言説に傾いている。とすれば、かような作者によって書かれた「ほんち」が、大阪社会を批評してみせた作品であった可能性は否定できない。念のため、泡鳴以外の人物が書いた当時の大阪論を参照してみたが、やはり「ほんち」には、大阪に暮らす人と街との本質を言い得ている面もあつたようである。

たとえば、当時大阪市長であつた植村俊平は、「大阪人の特長」〔報知新聞〕明治45・7・3〕という記事にて、次のとおり語っている。商売上の機を知ること明敏なれば「負けて勝つ」と云う金言を実行するに巧妙なり故に時期を視ては行掛に拘泥せず自ら折れて却て自己の目的を達することを喜ぶが如し

この発言は、芸子見たさに散財させられたことや、「脳味噌が溢れ出た」と思われるほどの激痛をも忘れようとする定さんの性格と行動とを言い表しているように写る。また、同記事の別章には「計算に敏なれば苟も損得の点に於て疑なき場合には利得の目的に向て突進するの勇氣は頗る顯著なり」とあり、こちらも周辺人物である友人の松さんたちのことを言い表しているかのようである。

ついで、大阪の街は、当時どのように語られていたのか。たとえば、

『大阪新報』では、大正元年八月三日から十六日まで、断続的に「明治晩年の大阪（一）十」¹⁶という記事が連載されている。詳細な都市データをもつて、当時の大阪を分析した本文は、「東洋のマンチエスターを以て任じ近き将来に世界大都付として紐育に比肩せんとする大阪市」と威勢よく始まるが、すぐに、次のごとく負の側面が強調される。

吾人の生活区域は一人僅かに四坪四合に相当しその窮屈なるは素より健康地にあらざるは年々死亡率の出産率に超過を示せるにても知り得べし

さらに、「由来大阪が水の都を以て貨物の集散市場として発達しその後更に工業地として発展し今や煤煙の都として大阪の反面を彩どり」との記述も見られるが、「煤煙の都」とは、当時の大阪を揶揄する言葉の一つであり、泡鳴も、先の引用において「不絶の煤煙」が大阪を覆っていることに触れている。そして「ほんち」でも、頭を打つという重要な場面で大阪の空が描かれているのだが、興味深いことに、本来「煤煙」を思うべきこの空が、定さんの目には映っていないのである。

大坂の方の空がぼうつと赤くなつてゐるのが見える。あの下にいるうちの者や好きな女子等が、殊に、隣家の静江さんも住んでゐるのだ、な、——そして、その空が車の向きで隠れて行くのを追ふために、定さんは窓から首を出した。そのとたん、頑固なおやにでも太い棒を以つて投られでもしたやうに、渠のあたまをいやと云ふほどがんとやつ付けて行つたものがある。

つまり、現実の空が見えていない、あるいはそれに気付いていな

い姿が、ここで〈笑い〉となっているのである。大阪という都市の特徴を下地とした〈笑い〉である。

さらに、当時の大阪を窺うべく、別の媒体に目を移してみると、「生活難が如何に多く大阪を敵うて居るかが判る、(略)五万人の生活難、二十五円以下の勤人数が貧窮の状態¹⁷⁾」というような、大阪府下での生活難を報じる記事が目につく。それに関連して、当時「ほんち」の執筆や読解に影響を及ぼしていた可能性があるので、新聞広告にて盛んに「東洋¹⁸⁾」を謳っていたルナパークと通天閣の開業である。それらが、大阪の新たなシンボル、また観光の起爆剤として開業したのは、折しも「ほんち」の脱稿と同じ明治四十五年七月である。ルナパークは、目新しさも手伝い、当初は大いに賑わったようであるが、そのお膝元の天王寺村といえ、当時は生活困窮者の多く集う場所として有名であった。たとえば、『大阪毎日新聞』では、まもなく開業という時期に合わせるかのように、「昨今の貧民窟(一七)」が連載され、「巍然たるエッフェル塔雲に聳ゆる天王寺新世界と公園の南裏手田圃西線のガードを越すと直ぐソコに七八十軒の貧民部落がある¹⁹⁾」ことが述べられ、その周辺村落の衛生状況の改善や救済事業が滞っていることなどが指摘されている。

「ほんち」の背景には、こうした大阪に住む者以外には見えにくい、人々の気質や大都市ゆえの課題が存在していた。当然、かような背景を読者が踏まえられるかが懸念され、単行本『ほんち』には「東京、関東、並に東北の読者や批評家には、集中の『ほんち』は十分に分りさうでない。」との「注意」がある。だが、実際は、批評家の多くは「ほんち」の大阪に注目しており、ある程度は理解されていた。

新世界は「東洋」であったのかもしれないが、その土地の経済を支える大店のほんちは縮まりがなく、その周辺の友人もまた陳腐な狡猾さに満ちている。「東洋」に相応するほど、当時の大阪は街も人も成熟していなかったことを踏まえれば、本作の〈笑い〉は、当時の大阪が、近代的な都市としては、まだ〈ほんち〉であるということを示していたのではなからうか。

三

かく論じてきたことを踏まえると、「ほんち」というタイトルは、さらに別の意味も有していたように思えてならない。というのも、そもそも「ほんち」とは「ぼつちやん」転。関西地方ノ一部ノ方言。幼童ノ一称²⁰⁾であるが、当時「坊っちゃん」といえば、しかも〈笑い〉を一つの特徴としていた先行作品といえ、自ずと夏目漱石の「坊っちゃん」(「ホトトギス」明治39・4)を想起させたはずである。むしろ、大店の若旦那である定さんは、典型的なあはほんちであり、漱石の「坊っちゃん」とは全く異なる印象こそあるが、かりに江戸っ子の「坊っちゃん」に相当する世界を大阪弁で表現するのであれば、その作品の題はやはり「ほんち」となる。

「坊っちゃん」のパロディについて言及されている『坊っちゃん』事典(平成26・10勉誠出版)によれば、大正九年に刊行された三四郎なる著者の「漱石傑作 坊っちゃん其の後」という作品は、またも東京を飛び出した坊っちゃんが、大阪へ移り、今度はほんちと呼ばれる話であったという。

むろん、泡鳴の創意までは分らないが、いずれにせよ、「ほんち」という作品が、時系列的に漱石の「坊っちゃん」を内包した形で成立していた可能性は否定できない。また、それを思わせる兆候も「ほんち」の中には大小存在する。

たとえば、「坊っちゃん」では、汽車に乗り「住田の温泉」(道後温泉)に出かける場面が度々描かれる。

四日目の晩に住田と云ふ所へ行つて団子を食べた。此住田と云ふ所は温泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓がある。(略)おれはこゝへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めて居る。(二三)より)

この温泉は、坊っちゃんが泳いでいたことで生徒に騒がれたり、宿直中に入湯したことで咎められたりと、「坊っちゃん」の構成上、重要な舞台となっている。ほかにも、うらなり君・マドンナ・赤シャツの三者が鉢合わせで、赤シャツの人物が見定められる場面も、汽車でこの温泉に向かう途中であった。

一方、「ほんち」では、先に見てきたとおり、前半に、電車で宝塚の新温泉に向かう車中の様子が描かれ、後半では、新温泉に着いた後の宴席の様子が描かれている。まず前半だけでも構成上の類似を考えてしまうが、その上、後半の宴席についても「坊っちゃん」が意識されていた可能性を指摘しうる。「坊っちゃん」の「九」では「うらなり君の送別会」が開催されている。

芸者が来たら座敷中急に陽気になって、一同が関の声を揚げて歓迎したのかと思ふ位、騒々しい。(略)其うちで手持無沙

汰に下を向いて考へ込んでるのはうらなり君許りである。自分の為に送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんぢやない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむ為だ。こんな送別会なら、開いてもらはない方が余つ程ました。(九)より)

これに対し、「ほんち」においては、定さんも、言葉巧みに酒の場へ連れ出され、そして、最終的には「おのれ等の勝手な飲み喰ひをしようが為めに、自分を怪我させてまでここまで引ツ張つて来たのだ」と悟っている。「坊っちゃん」のほうは、思う主体がうらなり君ではあるものの、周囲に利用され、孤立を深めていく展開は「ほんち」と同様である。

かような構成・内容面での類似に加え、ともに一人称の視点から語られる作品であること、さらに登場人物たちを基本的にあだ名で呼ぶという見逃せない共通点があるのだが、小さな点では、洒落の文句にも同一のものが見られる。次も「うらなり君の送別会」での一幕である。

向ふの方で漢学の御爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、御前とわたしのその中は……と迄は無事に済したが、それから？と芸者に聞いて居る。爺さんなんて物覚のわるいものだ。(九)より)

傍線部「そりや聞えません伝兵衛さん」は浄瑠璃「近頃河原達引」の中の巻「堀川の段」で、相手との別れを承諾できない遊女お俊が嘆く台詞である。一方「ほんち」でも、定さんの「苦しい、置いて呉れ」という要望に応える場面で次のとおりある。

松さんもその手の行つたところを撫でて呉れながら、『ソリヤキコエマセヌーデンベエサン』と語つてゐたが、やがて定さんの耳もとへ口を寄せて、『しつかりしなはれ、な、行たら、女子を抱かせてやるさかい、なア。』

低い声ではあつたが、定さんはそれが人に聴こえたらとあわてた。

こうして見てくると、「ほんち」が「坊っちゃん」と近似した作品であることは疑いようがない。「ほんち」は、先行する「坊っちゃん」が必然的に念頭に置かれる形で読まれる宿命にあつた。それにしても、なぜ「ほんち」は「坊っちゃん」に似てしまつたのか。すでに先行研究でも指摘されているが、じつは泡鳴は、当時漱石を意識した記述をたびたび披露している。記述のみならず、両者の交流も「ほんち」執筆までに三度あつた。

その様子は後日発表された漱石への追悼文「三度の面会」(『新小説』大正6・1)に詳しく記されているが、面会した際の感想は『池田日記』にも綴られており、たとえば、明治四十四年八月二十二日付には「近頃下阪中の夏目漱石氏が入院してゐるのを見舞いに行つた」、その感想として「考へて見ると、意思は強いが、近代的でない様子は、菊池幽芳氏とよく似たところがあるらしい。この両人が新聞小説家として、東西に相対し、而も最も敵対してゐる二新聞で対立してゐるのが面白い」とある。この見解を気に入つていたのか、明治四十五年四月には「漱石氏と幽芳氏^②」という両者を比較分析した論文を執筆、そこには次のとおり補足が加えられている。

前者(※幽芳)は専門的に通俗なのに反し、後者(※漱石)

のはただお世辞的にさうなつてゐるのである。その意思たるや、また等しく頑固であるにせよ、前者のは飽くまで生真面目だが、後者のは何処までも冷笑を帯びてゐる。

さらに、泡鳴が漱石を通俗小説家とみる理由の一つは「彼は万事を滑稽にしか受け取ることができないのだ。他の真面目な人が悲劇と見為すものをも、彼は喜劇にしてしまふ。これが『猫』の出来た所以だが、同時に彼は真の悲劇的趣味や思想を解し得ない所以」と述べており、概してその見識は認めつつも、その志向と作品については否定的な立場であつた。なお、泡鳴は「坊っちゃん」について、直接的な言及は残していないが、先の「漱石氏と幽芳氏」には、「猫」は評判の書物になるし、彼のその他の雑誌小説が出るに従つて、彼は江戸趣味的滑稽作家として盛んに歓迎せられた」とあるから、知らなかつたということとは考えにくい。「坊っちゃん」は同時代評でも(※笑い)の作品として認識されていた節があり、ここでいう「江戸趣味的滑稽作家」の「その他の雑誌小説」に合致する。こうした漱石への意識の中、「ほんち」発表直前の「思想界に於ける大阪の将来」(『文章世界』大正2・1)では次のとおり述べている。

現今、大阪に以上の見込みある文学者は一人も住んでゐない。(略)幽芳氏と夏目漱石氏は通俗小説家として東西に相対してゐるが、後者には東京人の特色が現はれてるのがまだしも取柄だが、前者に至つては大阪の郷土色は少しもなく、且わが国の一般的特色も見えない。

幽芳を大阪文学の代表的作家として挙げては見たものの、その通

俗性を含めて、まったく不満を隠さない。大阪には「見込みある文学者は一人も住んでゐない」というのが当時の泡鳴の想いである。東の漱石との比較という観点から、泡鳴の中では、大阪文学が立ち上がってきた点が重要である。

「ぼんち」が「坊っちゃん」に構成面また内容面で近似した部分が多い理由は、見てのとおり、漱石への対抗意識があったためではないか。漱石の向こう側に、泡鳴は何を見ていたのか。その答えの一つが〈笑い〉の近代文学の開拓ではなかったか。この時の泡鳴は、大阪文学同様、文壇が未到達であったその領域に並々ならぬ野心を持っていた。〈笑い〉の文学として、すでに成功していた「坊っちゃん」を換骨奪胎し、作品の中で〈笑い〉を都市批評（泡鳴言うところの「大阪研究」という形に昇華させ得る自信があったからこそ、何度も推敲し、満を持して発表した）であろう。

むろん、換骨奪胎しようとして、それが成し遂げられたかどうか、また本当に意識して作られたかどうかは、実際のところ定かではない。ただ、近似した部分が多いことは疑いなく、「ぼんち」が否応なしに「坊っちゃん」と比較される宿命をもった作品であったことは明らかなのである。「ぼんち」は、泡鳴が「第二の西鶴」を意識し、大阪文学かつ優れた批評性をもつ〈笑い〉の文学として打って出た作品であり、またそれらの観点から評価されてしかるべき作品といえよう。

【注】

(一) 同日の日記には「社へ行って、年号が「大正」と変わるのを知った。

けふ、大阪研究の最初の結果なる小説「ぼんち」(四十九枚)を脱稿した。」とある。

(2) 岩野泡鳴「現代小説の描写法」(『文章世界』明治44・2)、「小説表現の四段階」(『文章世界』明治45・7)など。

(3) 昭和女子大学発行『近代文学研究叢書第19巻』(昭和37・12)、角田敏郎「岩野泡鳴ノート」(『人文論究』昭和39・5)、大久保典夫「岩野泡鳴の研究」(昭和48・2冬樹社)など。

(4) 吉田精一「自然主義の研究(下)」(昭和33・1東京堂)

(5) 高橋敏夫「泡鳴「一元描写論」への視座」(『国文学研究第70集』昭和55・3)

(6) 鈴木鷹理「離れゆく語り手―「ぼんち」に見る小説表現の模索」(『日本大学大学院国文学専攻論集』平成23・10)

(7) 昭和女子大学発行『近代文学研究叢書第19巻』(昭和37・12)では、「脳味噌がはみ出しているような幻想におそわれたり、それでもがまんして芸者に見とれたりしているうちに、危篤状態となるとという人間の愚かさを描いた短編」とある。

(8) 大久保典夫「岩野泡鳴の研究」(昭和48・2冬樹社)

(9) 野口武彦「電柱にぶつけた頭―岩野泡鳴「ぼんち」」(『日本語学』昭和59・12)では、「ひとりのお人好しの馬鹿の物語」、「当事者それぞれの立場に応じて悲劇にも喜劇にもなりうる、そして世の中に意外によく起こりうる出来事の一齣なのである。ここには作者自身による冷嘲もなければ、感傷もない」とある。

(10) 田中和恵「岩野泡鳴「ぼんち」論」(『愛媛国文研究』平成11・12)。なお、田中は「ぼんち」が大阪を背景にしている点にも着目しており、

その舞台の一つである「宝塚」や、作中で行われる「玉突き」の意味も分析し、「泡鳴は、彼らを滑稽に描きながら、これらの人物の「不都合」を表し、批判をし、読者に対して作品の中においても自分の主義を主張したのである」と述べてはいるが、読解のための資料を「池田日記」や泡鳴の他の著作にほぼ依拠し、作者自ら提唱する「実行即芸術論」の作品と結ぶのでは、新たな泡鳴研究の地平を拓いたとは見せない。

(11) 岩野泡鳴「はしがき」(「猫八」大正8・5玄文社)

従来は、滑稽と云へば何だか無理に拵らへて行くものの如く思はれてたやうだが、この集のは決してそんな物ではなく、作者が観察し研究する人生の自然に詩として親しくしみ出した有情滑稽である。

(12) 拙稿「岩野泡鳴「猫八」に見る(笑)の近代文学——有情滑稽」

に潜む批評精神」(『日本近代文学』平成19・5)、「都会病の有情滑稽——

岩野泡鳴「浅間の霊」(『日本語と日本文学』平成20・2)を参照されたい。

(13) 無署名「都市の遠心力」(『日本新聞』明治45・5・18)24)

(14) 岩野泡鳴「思想界に於ける大阪の将来」(『文章世界』大正2・1)、のちに単著「近代思想と実生活」(大正2・12東亜堂)にも所収。

(15) 注5と同じ。「愚行から死に向うほんちの意識から離れない」「馬鹿だ、なア」という「東京弁」の持つ意味、ほんちの生活圏の大阪言葉(会話はみなそれ)と「東京弁」の鋭い対比は注意すべきであろう。」と指摘している。

(16) 『大阪新報』は泡鳴の勤務先ではあったが、文体・取材記録・引用資料から推して、本記事が泡鳴の書いたものとは考えられない。

(17) 「生活難問題」『大阪朝日新聞』(明治45・7・10)大正元・9・30)

(18) たとえば、「東洋」の大娯楽場ルナパーク」という見出しの広告は、

『大阪新報』(明治45・7・3)、『大阪毎日新聞』(明治45・7・7)、同紙(大正元・12・5)に確認できる。

(19) 「昨今の貧民窟(一)〜七」(『大阪毎日新聞』明治45・6・24)7・1)

(20) 山田美妙編『大辞典 下』(明治45・5嵩山堂)

(21) 夏目漱石「坊っちゃん」の章番号。以下同じ。

(22) 浄瑠璃「近頃河原達引」は、「天明三年から、昭和三年まで、百四十六年の間、日本の津々浦々まで、殆んど間断もなく(そりや聞へませぬ伝兵衛さん)と、口癖にまで、語らぬ日とてもない程の名作」(胴摺帽人「義太夫虎之巻」(『黒白』昭和3・5)とあり偶然一致した可能性もあるが、他の類似点を考慮すると、そう考えるのは難しい。

(23) 伴悦は『岩野泡鳴全集第6巻(泡鳴ノート6)』(平成7・10臨川書店)にて、樺太での事業への着手と失敗に際し、当時の泡鳴が「漱石の「それから」の代助や「私の個人主義」を思い起こさずにはおれなかつた」とし、「生涯にわたって強く意識しつづけた作家のひとりであった」としている。

(24) 「漱石氏と幽芳氏は、初出未詳。ここでは『岩野泡鳴全集第16巻』(平成9・7臨川書店)から引用した。

(25) たとえば、「現今の青年誰れか一たび『坊っちゃん』篇中の人たらざるべき。之を読んで破顔數番を禁ずる能はざるもの蓋し予一人にあらざるべし」(西山樵郎「夏目漱石を論ず」『文章世界』明治39・5)、「近時の他の小説家が描かんとする所とは全く範圍を異にして、万事を可笑しく滑稽に見ようとする」(正宗白鳥「大学派の文章」『文章世界』明治39・5)など。